

任地を訪ねて

アムセグナッロ! エチオピア

■中兼淳一(本庄市)

23年度1次隊 中兼久美子さんの父

「エチオピアはいい国だ。人が優しい。美男・美女が多い。気候が過ごしやすい。物価が安い。アムハラ語も文法が日本語に近くて親しみやすい。」というのが行ってきての感想。

8月のお盆を挟んでの11日間、真夏の赤道付近の国なのに、気温は20度に行かない。アジスアベバは標高2500m付近、厚手のラガーシャツの上にゴルフ用のジャンパーと、下はジーンズでちょうど良かった。現地でお世話になっている娘が「とーちゃん、日本の11月頃だと思っていいぞ。」と言っていたが、本当だった。でも、道ばたの果物屋には、バナナやマンゴーなどのフルーツがあふれていて、やっぱり南国の風情がある。不思議な感じ。

娘がお世話になっている高校を訪問した。校長先生以下、職員の皆さんが笑顔で迎えてくれる。「久美子は、いい子だ。」「がんばってる。」口々



に娘のことを褒めてくれる。お世辞を言っているとしても、親の私たちを安心させてくれようとするその心遣いがうれしい。職員の皆がそう



してくれるのだから、エチオピアはいい国だ。娘と私が(エチオピアで10回は泣くだろう。)と予想していた我が女房は、この日だけで予想を上回った。昼時だったため、事務のおばちゃん達が「私のインジェラ食べて!」と、手で口に入れてくれる。エチオピア式の歓迎らしい。初めてのインジェラ、酸っぱいけどおいしい。それぞれの家庭で味が違う。全員から歓迎を受けて、女房はまた涙。「アムセグナッロ!」覚え立てのアムハラ語でお礼を言った。

娘の案内で、庶民の市場に行った。あちこちで「クミコ!」と声がかかる。「へえ。たった1年で地元になじんだのか。娘もなかなかだなあ。」と感心する。それ以上に「大いに安心」した。角の食器店のお母さんに「ブンナ(コーヒー)飲んでけ!」と言われて、ごちそうになる。記念写真を撮ろうとすると、通りがかりの人が一緒に映ろうとする。それも3人もだ。笑顔で記念写真を撮って画像を見せるとうれしそうに去って行った。エチオピアはいい国だ。

● 36号目次 ●	任地を訪ねて.....1・2	現地レポート.....6~11
	家族連絡会.....2・3	帰国してから.....12・13
	出前講座.....3・4	会員趣味のコーナー.....13
	平成24(2012)年度壮行会.....4・5	新会員のご紹介.....14
	帰国隊員報告会.....5・6	お知らせ.....14

娘がホームステイした家、いつも親しくしてくれるおばちゃんの家、同僚の家、誰の家を訪ねてもみんな優しい。何がって、みんなが私たちの気持ちを思ん量ってくれるのだ。心くばりしてくれる。日本人と同じように。

ゴントール、ラリペラ、ズワイ、どこに行っても雄大な自然。かと思いきや、ベントと30年以上前の日本車と山羊とロバと一緒に通る首都の大通り。どの町にもあふれる子どもたちの姿。ぱっちりした目に通った鼻筋、すらっとした足の8頭身。

「アンチ、コンジョーネシ！フォト、マンサット、イッチャラル？」（あなた美人だねえ！写真撮っていい？）

たった9日間の滞在だったが、女房も私もすっかりエチオピアファン。

今だってコーヒーはもちろんシダモ産のモカ。娘が「エチオピアに行く。」と告げたとき、あんなに心配していた女房もすっかり安心して帰ってきた。おそらくおちょこ1杯以上の感涙をエチオピアに残して。

●家族の声

「不安」から「期待」へ

■河野眞樹（川口市）

23年度2次隊 ヨルダン 河野惇史さんの母

「青年海外協力隊に参加しようと思う」と聞かされたときには「エッ！」という驚きしかありませんでした。得意分野のスポーツで、現地の子どもたちにスポーツの素晴らしさ、楽しさを伝えたいと決意は固く、その後は資格を取得する為への生活に一変しました。TOEICへの挑戦、アラビア語の習得等、課題をひとつずつクリアする息子を、私はただ見守り、応援することしかできませんでした。

23年9月赴任地ヨルダンへと出発しました。独り暮らしは大学時代に経験しているので心配はありませんが・・・とはいえ、それは事があればすぐに駆けつけることができる国内、今回は違います。笑顔で送り出しましたが、気持ちは不安で押し潰されそうでした。IT機器が不得手な私にでも手持ちの携帯でメールができるようにとアドレスを設定してくれましたが、第1報は「赴任早々、扁桃腺炎で高熱にうなされ、お尻に注射を打たれた」と「苦笑いマーク」付きのメールと、ホームステイしているときに撮った写メールでした。両手を広げ空を見上げる息子の姿に少し安心しました。



成田にて

二人の兄、従姉妹とはツイッター、フェイスブック等でやりとりしていて、時おり姪から「元気で頑張っているみたい」「悩んでいるようだからアドバイスしておいたよ」と報告が入ります。頼もしい応援団に感謝しています。

赴任してそろそろ1年というころ、隣国シリアでの紛争のニュース。「こちらは大丈夫です。安心して下さい」と連絡はありましたが、不安感は消えません。そんなとき「帰国報告会」のおしらせに、ヨルダンから帰国された山森優子さんのお名前を目にし、参加させていただきました。

映像を見ながら、現地での生活、活動の様子を伺い、ご本人ともお話をさせて頂いているうちに、不安は消え去り、子どもたちに囲まれ頑張っている息子の姿が思い浮かんできました。今秋帰国予定の息子、諸先輩方のように立派に活動を務め終え、現地での経験という大きなみやげを持ち帰ることを期待し、私は待っていようと思っています。

★家族連絡会

日時：平成25(2013)年3月3日(日)

主催：JICA 地球ひろば

共催：青年海外協力隊埼玉県OB会

埼玉国際青年を育てる会

会場：大宮ソニックシティ906

今年も、派遣中のJICAボランティア（青年海外協力隊、シニア海外ボランティア、日系社会青年ボランティア、日系社会シニアボランティア）の留守家族の皆様を対象に、家族連絡会が開催されました。主催者による開会の言葉、来賓の埼玉県県民生活部矢嶋国際課長の挨拶に続いて、次の4人の方から報告および説明がありました。

①「JICAボランティア事業の概要および支援体制について」ー地球ひろば地域連携課長 長谷川



敏久氏— 事業の目的や待遇に加え、緊急時の現地安全対策情報の収集、心身の健康管理についての説明がありました。

②「JICA ボランティアの帰国後について」— 青年海外協力隊進路相談カウンセラー 小室駿一郎氏— 教員、公務員対象の特別選考等の就職情報、そして「教えることより現地から学んだことが多い」「母親も変わってくれたことがうれしかった」など、隊員の声の紹介もありました。

③ 帰国ボランティア活動報告— JV21 年度 4 次隊 エチオピア村落開発普及員 小林愛氏— 当初、要請内容になかった「草の根友好活動」が自分を変えてくれたこと。安全な限り、様々な経験を積むことの大切さなど、熱く語って頂きました。

④「埼玉国際青年を育てる会」の事業紹介— 埼玉国際青年を育てる会 大原薫事務局長— 一会の目的や壮行会などの支援活動、報告会、出前講座などの育成活動そして、広報活動についての分かりやすい説明がありました。



休憩を挟み、ボランティアと参加ご家族の派遣地域別懇談会が、2 部屋に分かれて行われました。数名ずつの家族の方々の中に OB が説明役となって入り、パソコンの映像や写真の提示、そして、印刷物を配布するなど、分かりやすく丁寧に、現地の様子を説明していました。やはり、事件のあったアフリカ派遣の安全へのご家族の関心は高く、真剣に聞き入っていました。(小島章裕)

★出前講座

平成 24 (2012) 年 11 月 30 日金曜日、川越市立名細中学校において、出前講座が開かれ、学校側の要請で 3 名の青年海外協力隊員が派遣されました。

そして、3 年生の 3 クラスに 1 名ずつ、40 分の授業を受け持つことになりました。

名細中学校での、青年海外協力隊員の出前講座は今回で 2 回目になるということで、生徒たちは青年海外協力隊についての、事前学習を済ませているということでスムーズに授業が始まりました。

受験という、大きなハードルを前に、未知の



国々の困難な環境の中で、果敢に挑戦する隊員たちの姿は、子供たちにとって、大きな刺激となり、特別授業となったようでした。

● 3 年 1 組担当 近藤麻衣子さん (青年海外協力隊 20 年度 4 次隊 トンガ 日本語教師)

パソコンを使って、多くの映像を見ながらの楽しい授業でした。すべてに、のんびり、ゆっくりしたトンガの人々の生活ぶりに、子供たちは珍しそうに見入っていました。しかし、近藤さんの、現地で苦勞話にはみんな一緒に心配をしていました。

● 3 年 2 組担当 青木伸江さん (青年海外協力隊 20 年度 4 次隊 タンザニア 村落開発)

開始直後、パソコンの具合がよくなかったようで、青木さんも、子供たちも少々あわてたようでしたが、10 分後、映像が出てきた途端、みんなほっとして一気に教室中が一つになり、授業への関心が盛り上がったようでした。

青木さんが、子供たちの見知らぬ国 タンザニアで、何をしていたのか、みな興味津々・・・。

赴任当初、水がない、電気がない、食事は一日に1～2回、虫除けの蚊帳の中には時々ネズミやトカゲが・・・などなど、青木さんの生活の手立てを整えるための話は、子供たちを驚かせるのに十分だったようです。

● 3年3組担当 横田明菜さん（青年海外協力隊 21年度3次隊 メキシコ 環境教育）

横田さんは、子供たちが、青年海外協力隊の事前学習を済ませている、ということで質問の時間を多く取りたいと授業を始められました。

仕事は、生ごみの減量化を目的に、ミミズを使って堆肥を作り、それを販売する仕事・・・との説明を聞いて、子供たちはびっくり、ミミズが生ごみを堆肥に変えるなんて聞いたこともなかったようで、現場の映像を真剣に見ていました。映像を見終えて早速質問に入ったところ、最初の質問は・・・。

協力隊の給料はいくらですか？

これには横田さんもびっくりしたようですが、青年海外協力隊の仕組みや、日本と、メキシコの国情、風土や風習の違い、生活物価の違いなどを踏まえて、丁寧に説明していました。それにしても、とても現実的な質問に私もちょっと驚きました。それだけ彼らには協力隊の仕事が身近に感じられたのかもしれませんが。

今回も出前授業は、どのクラスも素晴らしい成果を上げたように思いました。



豊富な映像を見ながら、隊員たちの体験談の中から子供たちはきっと何かを感じ取ったことと思います。終了後の3隊員の話の中で、・・・もう少し時間がほしかった・・・とありました。本当に素晴らしい出前講座でした。

ところで、今回お伺いした川越市立名細中学校「なぐわし」中学校ですが、校名の由来が素晴らしいのでご紹介します。今年、開校66周年というこの学校の名前は、あの有名な万葉集の柿本人麻呂の歌の一節から取ったのだそうです。

・・・名細しき 稲見の海のおきつ波 千重に隠りぬ 大跡島根は・・・

名細しの「名」とは、高句麗語で「地面」のこと、「細しい」とは「美しい」との意味があるそうです。当時、このあたりは、稲穂の揺れる豊かな大地だったようです。それにしても素晴らしい校名ですね。
(樋口暁子)

★平成 24(2012) 年度壮行会

■ 24 年度 3 次隊 壮行会

2012 年 12 月 18 日（火）

さいたま商工会議所会議室 1F ホール



穏やかな冬の午後、埼玉国際青年を育てる会と青年海外協力隊埼玉県 OB 会の主催で 24 年度 3 次隊 壮行会が開催されました。今回は、ルワンダ、モルディブ、キリバスやケニアなど 10 ヶ国に 10 名の青年海外協力隊員とコロンビアとウルグアイに 2 名のシニア隊員、合計 12 名の隊員が

2 年間のボランティア活動に参加します。育てる会の星野和央会長より、隊員への激励の言葉と育てる会の活動についてあいさつがありました。育てる会は協力隊の活動を支援する応援団として、隊員一人ひとりの成長と、人と人の関わりを大切に支援しています。隊員の皆さんには、夢を描こうとしている若い世代に自分の経験と想いを伝えて欲しい、と述べました。来賓のあいさつとして、JICA 地球ひろばの長谷川敏久課長から隊員たちに、いろいろなことに関心を持って元気で活動して欲しいと激励の言葉があり、埼玉県国際課の滝澤剛主査、社団法人協力隊を育てる会の伊藤総一郎事業 1 課長からそれぞれあいさつがありました。大原薫事務局長の司会で隊員からの自己紹介があり、村落開発や看護師、教諭などとして派遣される隊員から各人の抱負と期待が述べられました。

この後、隣室の会場で親睦会が行われ、育てる会常任理事の森末桂一さんの乾杯で和やかに歓談



が始まりました。協力隊 OB 会の榎本敬会長ほか OB の方々から激励の言葉をいただきました。参加された 3 名の隊員のご家族は、緊張と不安とともに隊員の活躍を期待する気持ちを語っておられました。

隊員の皆さんのご活躍を期待しております。

(中島美都里)

■ 4 次隊壮行会 (兼 22 年度隊員帰国歓迎会)

2013 年 3 月 22 日 (金)

さいたま商工会議所会館 1 F ホール



春の彼岸も過ぎた、穏やかな金曜日の午後、当会と協力隊 OB 会、シニア海外ボランティアそしてご家族の方々が、青年海外協力隊 (J V) 13 名そしてシニア海外ボランティア (S V) 2 名、計 15 名の 4 次隊員そして 22 年度の帰国隊員 5 名をお迎えして開催されました。

星野会長より、育てる会の役割や支援内容についての説明と、国際的な視野にたって活動してほしいとの話がありました。

来賓のあいさつを紹介すると JICA 地球ひろば 杉山充邦氏は「活動分野以外に趣味など、人々を引き付けるもうひとつの特技を持っていくと良い」と、そしてアメリカから埼玉県国際課にいられたブレイン・ケラー氏は、「間違いを恐れない。そして地元の人の意見を聞く」。(社) 協力隊を育てる会の佐藤奈保子さんもはなむけのお話をされました。

隊員は一人一人が「現地に何を残したいか」そして「現地から何を持って帰りたいか」を主な

テーマで語っていただき、「広い心を持ちたい」「任国人になりきりたい」「笑顔を任地に定着させたい」など熱い気持ちを語っていました。

また、22 年度に任地へ派遣され、すでに帰国された方のうち 4 名の J V と 1 人の S V が現地の苦労や喜びを、これから出発される隊員へアドバイスされました。



4 次隊員の派遣先は、アフリカ 10 名、アジア 4 名、南米 1 名、そして職種は村落開発 4 名、教師 2 名、工作機械など色々の分野の精鋭でした。今回は男性が 12 名、女性が 3 名と圧倒的に男性が多かったです。参加者は合計 45 名と多く、話が尽きない壮行会でした。

(高野直明)

★帰国隊員報告会

平成 24 (2012) 年 11 月 17 日 (土)

埼玉会館

埼玉県から矢島国際課長をお迎えして、協力隊 2 人、シニア 1 人による帰国隊員報告会が行われました。

一番目に、ヨルダンで青少年活動を行った山森優子さんが、民族衣装に身を包んで登場しました。表情豊かに「親日国ヨルダン」を紹介したあと、現地の幼稚園で実施した青少年活動について



熱く語りました。おしゃべりばかりしている先生。子供たちを棒でたたく先生。勉強ばかりで遊んであげない先生。一方、子供たちは、マナーを教えられず、授業中にお菓子を食べたり……。早速、山森さんは、先生方の勤務態度、指導法の改善を園長先生へ訴えるとともに、遊びに飢えて

いる子供たちに得意の歌声を聞かせ、遊びを教えたそうです。当初、指導法を理解できなかった先生方にも、やがてその熱意が伝わわり、子供とともに清掃や歯磨き活動など、目に見えて効果を上げました。「イーシャアッラー・人事を尽くして天命を待つ」と、締めくくりました。

次は、シニア海外ボランティア、青木和一さんです。太平洋戦争の激戦地ソロモンでの、定年退職前の技術を生かした、現地にとけ込んだ大活躍の話でした。

青木さんの任務は、医療機器メンテナンス活動のはずでしたが、持ち込まれる修理は、大型非常用発電機から、水道のパッキンに至るまで、ほとんどが専門外でした。しかし、「何でも対応してくれる」青木さんに、信頼は高まります。さらに説明書をすぐに捨ててしまう人たちには、正しい使いかたを指導するなど、現地の人々が自立できる道をつけることに尽力しました。



自らつくる料理を現地の人々にふるまうなど、現地の人々とともに生活を楽しんだ青木さんは、胸を張って言います。「(人と人との助け合いを大切に) ソロモンの人たちは経済的には豊かでないが、おなかですいて死ぬ人はいません。」

最後の報告は、小林愛さんのエチオピアにおける、貯蓄信用組合銀行立て直しの話でした。

銀行の改革を基礎基本から指導するという、もどかしい思いをしながらの活動でした。彼らが、自分自身で生きて行くことこそが大切だと思い、懸命に指導するのですが、いつも、思い通りには行きません。何のためにこの国を発展させようとしているのか、わからなくなりました。そんな小



林さんを支えていたエネルギーの源は、行き帰りのふれあいだったと言います。オロミヤ語を学び、いつも立ち寄るお店の主人と、笑顔で世間話ができるようになったころ、「ここでは、貧しくてもみんな幸せ。笑顔で楽しく暮らしているのだ。そして、自分がいることによって、少しでもみんなが楽しくなればそれでよい。」と、思えるようになりました。帰国してから、被災地のボランティアに入ったそうです。さらなる一歩のために。胸の熱くなる、皆さんのお話でした。

(小島章裕)

現地レポート



■森田光一（新座市）

24年度3次隊 ルワンダ プログラムオフィサー
アライブ・ルワンダ

バンコク（タイ）、アディス・アベバ（エチオピア）、カンパラ（ウガンダ）を経由して、ようやくルワンダ上陸しました。初印象としては暑い、ということです。出国前の成田近辺は何年振りの大雪に見舞われて、交通インフラが麻痺していましたので、あまりの変わりように当然といえば当然ですが戸惑いました。数日間種々の手続きを行い、現在は3月上旬まで現地語キニアルワンダ語の習得を目指し、現地家庭にホームステイをしながら語学学校に通う日々を過ごしています。事前の情報通り、この国は平地が少なく丘だらけです。目の前に広がる丘陵は眺めもよく美しいのですが、すぐそこに見える地に行く際も、上って・下ってを何度か繰り返す必要があります。徒歩での移動が困難な事はもちろん、主の交通手段であるバスでさえ上りは辛そうなエンジン音を轟かせながらゆっくりと上っています。

食事についてですが、主食はずばりポテトです。レストランでも家庭の食事でも調理方法は違えど必ず出ます。ポテトに加えて、豆やパスタ、

野菜、肉がその周囲を彩ります。ルワンダではビュッフエスタイルが標準で、レストランでは一皿いくら、という料金体系で一皿であればどんなに山盛りでも肉以外は決して文句を言われることはありません。



まだ日も浅いので確かな事は言えませんが、ルワンダの印象としては穏やかな印象があります。東洋人ということで目立つはずなので執拗に声をかけられたり、周囲を取り囲まれたりしても致し方ないと思っていましたが、そういった事はあまりありません。近い事がありますが、それも慣らしさをもちながら、そして怪訝そうにするとすぐに引いてくれます。そのような国民性なので、身の危険を感じるような事もなく暮らしやすい国です。今後は現地語の習得と並行して、より深く現地の方々とのコミュニケーションをとっていきたいと思っています。



■鈴木かおり（加須市）

23年度4次隊 ルワンダ 青少年活動

ルワンダと私の活動

10歳のあなたがもし、ある日突然、一人で生きていくことになったらどうしますか？

食べるものも、住むところも、自分でなんとかしなくてはいけない状況を想像できますか？

私は今、ルワンダの首都キガリにある、ストリートチルドレンの保護施設で青少年活動隊員として活動をしています。ここには、路上で保護されてきた8歳から15歳までの男の子たち約50名が常時生活しています。ではなぜ、子供たちは路上にいて、そして保護されてきたのでしょうか？

ルワンダのストリートチルドレンの多くは、家庭の貧困が原因で路上へと出ます。「食べるものがない。」「学校へいけない。」「薬物やアルコール依存の親から虐待を受ける。」そういったもの



のから逃げてきた子供たちは、市場やバスターミナルなど、人の集まる場所にたどり着き、仲間を見つけ、小さなグループを作って自分たちで生活し始めます。物乞いや窃盗、僅かなお金を稼ぐ仕事为主な生活手段です。しかし本来は大人から守られるべき存在の子供たち。空腹や不安から逃れるために、安価な薬物に手を出してしまう子がたくさんいます。そして今度は、薬物を手に入れるために物乞いや窃盗をするようになります。そのようにして犯罪に手を染めるようになった子供たちが、警察に捕まったり、施設のスタッフに保護されたりして、施設へとやってきます。



私はここで日常生活の指導をしながら、空き時間に、描画や工作・運動や音楽を教えています。家庭や路上で厳しい生活を送ってきた子供たち。大人を信用できず、平気で嘘をつく子。モノを盗む子。すぐに暴力を振るう子…。そんな子供たちに、様々な遊びを通して楽しみと喜びを与え、心のケアをすることが主な活動です。信用していた子供たちから裏切られたり、思いが伝わらなかったり、悲しいことや辛いこともたくさんありますが、子供たちの笑顔と「楽しかった！ありがとう!!」という言葉に支えられながら、日々活動しています。

■ 唐川史子（三郷市）

24年度3次隊 モロッコ 水泳

La vie de Maroc

モロッコ隊は、一ヶ月間のアラビア語モロッコ方言（Darijya）の訓練、ホームステイ先での生活を終えまして、一人暮らしに突入しました。

1月8日に赴任して、もう既に一ヶ月経ってしまったのかと思うと、ものすごく時間の流れるスピードが早く感じられます。

ここモロッコにいて一ヶ月で実感するのは、モロッコ人は優しく温かい人が多いということです。

まずは、ホームステイ先のファミリー。私は、長いあいだボランティアを受け入れているというお宅で息子、娘がほぼ同世代という4人家族の中で一ヶ月間ホームステイをしました。こちらでは、FARAHというアラビア語で笑顔、幸せという名前をつけてもらい、家族の一員として、迎えてもらいました。私が、一度ウェルカムシャワーならぬ下痢と嘔吐に苦しんでいた時も、家族みんなが心配してくれ、お母さんが良く効くと言って作ってくれた非常に渋くて苦いお茶のおかげで、一日で回復しました。また、お父さんの親戚の結婚式に三日間あるうちの最終日のパーティーに招いて下さり、歌い踊りを夜遅くまでみんなで楽しむ姿に、モロッコ人のお祭り好きは日本人と一緒だと共通点も見つかりました。



次に、語学訓練。授業では、とにかく使って話すDarijyaを教わり、買い物メインでの会話をひたすら勉強しました。市場で商売する方達は本当に優しく、私たちがDarijyaの勉強で市場に来たことを知ると、これはアラビア語でなんというのかを詳しく教えてくれたり、フランス語ではなく、あえてアラビア語でのつたない会話に付き合ってくれたり、本当に親切にいただきました。その結果、日常の楽しみはピーナッツやかぼちゃの種、搾りたてのピンクグレープフルーツジュースをDarijyaを使って、人と話して買うことなど、とてもちっぽけなことですが、私は非常に大きな幸せを感じて生活しております。

これから、一人暮らしが本格的にスタートし、本業であるプールでの指導にも携わっていきます。冬のモロッコは外の気温に対して特に室内温度が、床がタイルということもあり非常に寒いので、体調管理をしっかりと生活していきたいと思います。



■ 齋藤紗智恵（八潮市）

平成24年度3次隊 ザンビア 青少年活動

ザンビアに派遣されて1か月と1週間が経ちました。このような形でザンビア・アフリカの様子をお伝えできることを嬉しく思います。

ザンビアへは香港、ヨハネスブルクで2回乗り継ぎをして入国しました。

最初の1か月は現地訓練として安全管理、文化、任地訪問、現地語訓練、を受けつつ一緒に派遣された仲間と隊員連絡所で共同生活を送っていました。その後、任地へと入り、今は配属先にて活動中です。

ザンビアの人々はとても温和で親切、そしておしゃべり好き、というのが今の印象です。その人柄が反映されているかのように、時間がゆっくり流れているように感じます。首都ルサカでは生活に不自由しないほど物がそろっています。



私の配属先はストリートチルドレンだった子どもたちが共同生活をしながら、敷地内にある学校へ通い地域のコミュニティスクール（公のものではない、寺子屋のような学校）に通えるように、サポートをしています。私は現在は教員のサポートのようなことをしています。

子どもたちは勉強に対してとても意欲的で、正解すると本当に嬉しそうな表情を見せてくれます。教員不足、効率のとは言い難い授業展開等、課題が少しずつ見えてきています。また、英語が公用語ではあるものの、ここにいる子どもたちの半数以上が現地語しか話せません。英語もままならない私が現地語しか話さない彼らとどうコミュニケーションを取っていくか、チャレンジしがいのあることがたくさんあります。

ザンビアに来て、小さなことが幸せに感じます。ゆっくり時間の流れる国、ザンビアでの生活を楽しみたいと思います。

■田島久美子（伊奈町）

24年度3次隊 ケニア 村落開発普及員

4次隊のみなさんはちょうど今頃出国でしょうか。私はケニアに着いて3か月が経ち、元気にやっています。

ここケニアでは、3月頭の大統領選挙に伴い首都ナイロビへの2週間の退避があり、選挙後も落選候補からの異議申し立てなどがあってなかなか落ち着かない日々でしたが、今日、最高裁による判決が出て、ようやく次期政権が腰を据えてスタートしそうです。



こちらでは皆政治に熱心で、あるケニア人は「日本はもう国が成熟しているだろう。ケニアはそうじゃない、今、国づくりの真っ最中なんだ。みんな真剣だよ」と話していました。

埼玉出身同期のT君も、赴任先の小学校で元気にやっているようです。

私は農業省の地方事務所所属ですが、今のところスワヒリ語と英語に苦戦しており、活動らしきことはまだまだこれからです・・・

焦らず、Polepole（スワヒリ語でゆっくりの意味）でやっていこうと思います。

写真は、私のいるエンブという町の様子です。結構都会です。

行事などがありましたらお知らせくださいませ。どうぞよろしくお願いいたします。

■大橋みぎは（ミギワ）（さいたま市）

24年度1次隊 ガーナ 小学校教諭

ガーナ便り

私は、昨年の6月から約1年9か月間、青年海外協力隊員としてガーナへ派遣されています。これになることは中学生からの長い夢でした。

11年前に埼玉県の小学校教員に採用され、子どもたちと充実した日々を過ごしていましたが、この度機会をいただき、環境教員制度を利用して、ガーナ共和国で働いております。

赴任先は、首都アクラから東へ約130キロ離れたアカチ郡教育事務所で、主な活動は、理科・算数を中心とした教育の向上です。



●小学校巡回指導

私の赴任しているアカチ郡には66校の小学校が存在します。そこを1校1校巡回し、教材を活用した理科・算数の模擬授業を行って指導力向上を目指しています。

日本との学校環境の違いは、大きく次の3つを挙げることができます。

① 設備・教具

コンクリートでできた教室もあれば、木の柱と藁で造っただけの教室もあります。教室には蛍光灯などの明かりはなく、黒板は木の板に色を塗ったものを使用しています。教具は、日本のように子ども一人一人に行き渡る数どころか、一つもないことの方が多いです。教科書は全員に支給されるはずなのですが、児童・生徒の数を正確に把握できていないのか数が全く足りず、新年度になっても新しい教科書は必要十分数は支給されず、学校保管用の教科書を使い回して、1冊を複数名で使用しています。

こう書くと「かわいそうな国」と捉えられてしまいそうですが、そうではありません。暑い国ガーナでは、木の柱と藁の教室は風が通って大変気持ちがいいです。時々屋外で授業をしますが、心まで開けて大らかになる感じがします。ただ教

具についてはどうにかならないものかと思えます。各学校には児童人数分の学校運営交付金（キャピテーション・グランド）が支給されています（児童一人につき4.5ガーナセディ＝約200円。新年度開始時は、学校は児童集めに時間を割く）。しかし、校舎が十分に整備されていないため、その修繕に費用が使われたり、教具自体手に入るのが難しい状況にあたりして、子どもたちが操作して思考したり経験したりする場面は本当に少ないです。

② 教員の態度

これまでに見た教師の姿を全体像としてお話しするならば、日本の経済力・技術力を羨ましがると、自分たちで工夫しようとする姿はなかなか見られないと思います。責任を個人で負う日本と比べ、本国は神様の成したことで考えたり人のせいにしたりする傾向が強いです。遅刻する教師も見られ、朝会の時間にいるのは子どもたちだけということも度々目にします。しかし、それによってなのか、子どもが自主的に儀式的行事を進行したり、上級生が下級生の躰を行ったり勉強を教えたりする姿が見られます。教師の言葉は絶対で、子どもは大人を敬い、手伝いを行っている姿が多く見られます。

③ 保護者の理解と参画

PTA組織はこちらでもあります。活動の主な内容は、前述のキャピテーション・グランドの用途についてのようです。授業参観は行われません。私は巡回指導する時に地域の人、保護者を呼んで参観して欲しいとお願いしています。授業参観を行うと、保護者も子どもと同じように集中し、発言するので、「今は子どもたちに聞いているの」と言いながらも楽しく授業を行っています。未来を担う子どもたちの教育については、教師だけでなく全員で関わり良くしていくのだ、という考えが広がるのを願っています。

④ 今後の目標

私の活動は、もうあと1年しかありません。そこで取り組んでいきたいのは、教材紹介と教員研修そして授業参観の継続です。JICAの「現地業務費」と「世界の笑顔のためのプロジェクト」を活用し、教育委員会内に教材室を設置し、いつでも先生方が来て参考にすることができるようにと考えています。また、JICAが推進したINSETと呼ばれる教育研修をさらに意義あるものにすべく、日本で培った経験を十分生かし、コーディネートしていきたいと思っています。

■ 葛木 緑吾（深谷市）

24年度2次隊 ウズベキスタン

PCインストラクター

ヌクス市31番学校活動報告

PCインストラクターとして、ウズベキスタン共和国カラカルバクスタン自治共和国ヌクス市の31番学校で活動しています。任期は、2012年10月2日から2014年の10月1日までです。

第一に任地のカラカルバクスタンについて簡単に記したいと思います。そのあとに、活動状況と今後の課題について書きたいと思います。

カラカルバクスタン自治共和国は、ウズベキスタン共和国の西部に位置しています。カラカルバクスタン自治共和国は、ウズベキスタン共和国の一部ですが、独自の憲法を持っています。カラカルバク人、カザフ人、ウズベク人、ロシア人などが住んでおり、民族構成は日本と比較すると複雑です。首都は私の任地のヌクス市です。



任地はヌクス市31番学校という小中学校です。現在は日本語を教える活動が主です。正規の授業ではなく、サークル活動の中で教えています。月曜日は、4年生から6年生、火曜日は7年生、水曜日は8年生、木曜日は9年生が対象です。時には金曜日にも、月曜から木曜日に事情があって出席できなかった生徒に教えることもあります。一回の授業はだいたい、1時間半から2時間です。日本語を教えてほしいという要望があったためサークルを立ち上げました。日本語教授法を体系的に学んだことも、日本語を教えた経験もないため、授業は試行錯誤の連続です。授業の改善の余地は多々ありますが、そのような授業でも根気強く生徒が勉強しているのを見ると、できる限り良い授業にしたいという気持ちが強くなります。

上記の日本語のサークルの質を向上させることが、今後の課題の1つです。日本語の教師として派遣されている先輩隊員のアドバイスをもとに、改善していこうと考えています。



2つ目の課題は、配属先のウェブサイトを立て上げることです。できるだけ早く、カラカルバク語のウェブサイトと同僚教員と協力して作成したいと考えています。現在はウズベク語で活動しておりますが、任地の人々の母語は、主にカラカルバク語です。活動と並行して、カラカルバク語の学習を続けていきたいと思ひます。カラカルバク語を習得することが、任地の人々の心により近づくことができる最良の方法だと考えています。これからも体調に留意して、任地の文化を吸収しながら、頑張っていきたいです。

■滝沢浩一郎（杉戸町）

23年度4次隊 パプアニューギニア

村落開発普及員

パプアニューギニア

パプアニューギニア（以下 PNG）では、800の言語が存在すると言われていふます。その言語の数だけ民族が、つまり 800 の民族がいていふわれています。PNG の人々は自分が属する民族に誇りを持って生きています。そのため民族間のつながりは非常に強く、ワントク（同じ言語を使う人、という意味）システムと呼ばれる独特な相互扶助の慣習を持っています。天然資源が豊富とはいふ開発という点ではまだまだ成長段階ですが、こういった人と人とのつながりを大切にする慣習は、日本人が見習うべき点も多いといふえます。



独立記念日にて

そんな PNG と日本のつながりは、太平洋戦争中に戦地になったことで有名です。現在でも多くの戦跡が残り、戦争で亡くなった方々の遺骨や遺品が発見されることも少なくありません。歴史的な観点からみても、我々青年海外協力隊が PNG で活動することにはとても大きな意味があるのだと感じています。こういった歴史があるにも関わらず、PNG の人々は驚くほどに日本人が大好きです。例えば、私が日本人とわかつと、「フレンド!!」「ブラザー!!」と笑顔で握手を求めて話しかけてきてくれます。ここまで日本人が大好きな国は、なかなかないのではないのでしょうか。私は村落開発普及員として稲作の普及活動をしていふますが、どの村に行つても日本人である私を村の人々は歓迎してくれまふす。



活動中（精米指導）



シンシン（伝統的な踊り）

PNG では、私の活動の目的の一つである食糧安全保障の確保以外でも、インフラ整備、教育水準の向上、医療設備の充実など、まだまだ改善しなくてはいけないことが山ほどあります。私の活動を通して、PNG の人々のためにどれだけの貢献ができるのか正直わかりません。しかし、日本のことを大好きでいてくれる PNG の人々を一人でも多く笑顔にできるように日々精一杯活動を行っています。そして、私自身も活動や生活を通して PNG のことを理解することで、さらに好きになれば素敵なことだと思ひています。



帰国してから

■浅見早登子（秩父市）

21年度1次隊 シリア 新体操

私はシリアにて21年度1次隊として2009年6月から2011年4月まで新体操の指導をしていました。



シリアの情勢悪化により予定よりも2ヶ月早くの帰国となりました。と同時に日本では東日本大震災。新聞で見るよりも、テレビで見るよりも、人に聞くよりもまず、現地へ。という一心でした。

2011年4月から一般社団法人プロジェクト結のメンバーとして宮城県石巻市を中心に学校サポート、子供の支援、託児所の運営をしております。震災から今年で2年目を迎え、現在は地元の方を雇用し来年は引き継げるよう支援の形を変えていこうと思っています。



協力隊を経験し一番変わったことは、「国境がなくなった」ことです。

自分と違う考え方や意見を広い視野で受け入れられるようになりました。そして、考えるよりもまず行動から学びがある事も痛感しました。

2012年4月、昔から行きたかったアメリカへ3ヶ月間行き、小学校で日本についての紹介をしたりしました。

途上国で現地の人と一緒に働きながら、思い通りになんて殆どいかないうち、何が現地に本当に必要かを本気で考える。想いを伝える。といったことが今糧になっているような気がしています。

途上国で過ごした後日本に帰国すると、日本の社会に馴染むことに抵抗を感じる人が多いように感じているしまた、私の周りでも多いような気がします。

大切なのは日本に帰ってきてから何をしたいか考えるよりも、任国にいてエネルギーのある間に何をしたいかある程度明確にしたほうがその後経験を活かせるような気がしています。何をしたいか、何ができるのか。を決められるのは自分自身だと思うので協力隊へ参加したことが目的とならないよう、通過点であるということを任期中に考えられれば良かったと思います。

そして、任期中にはたくさんのネットワークも作れます。

通過点と考えれば任期中はもっと充実した時間を過ごせるとも思います。

途上国にいた経験は新鮮なうちに自分の「売り」にすべきです！



■安室龍男（さいたま市）

パキスタン 2006年・ベトナム 2008年

SV 赴任帰国後の NPO 活動

パキスタン（人事マネジメント -2006年）、ベトナム（経営企画 -2008年）のSV赴任帰国後、元赴任時の事務所長の紹介でNPO「民族フォーラム」（以後、MFと言う）に入会した。MFは、埼玉県・東京都及び（財）埼玉県国際交流協会の幹旋で、法定廃棄済消防車・救急車と検診車を無償譲渡してもらい、在日ミャンマー（緬国）大使館経由で、緬国民の平和維持活動推進と医療環境向上の目的で、緬国政府に無償供与している。



2010年8月頃、前記大使館経由でMFが緬国民の生活向上貢献者として表彰したい旨の招待状が届き、同大使館から特別入国ビザ（招聘無償）をいただき、2010年10月末理事長の名代として技術担当理事とヤンゴンでの表彰式典に臨んだ。

式典会場は、緬国社会福祉省大臣・次官及び消防庁長官と消防庁／保健庁幹部約50名と在緬日本国大使館参事官と日本人会会長それに報道陣も待機しており、TVは同夕全緬国に放映・新聞は翌日掲載され、同夕には大臣主催のデイナーパーティも開かれた緬国を上げての表彰式典であった。また、貧困のために公立小学校に通学できない子女が学ぶ、寺子屋を視察した様子も新聞に掲載された。



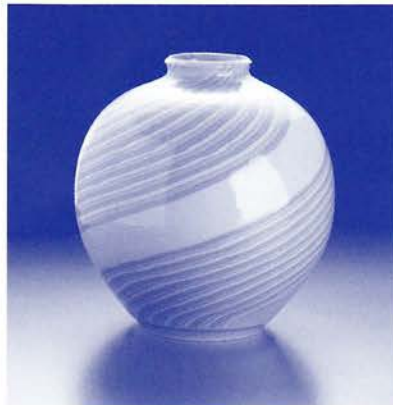
2011年の緬国の民政化に伴い、国名も緬国連邦から緬国連邦共和国に変わり、新任大使から緬国発展貢献者として「緬国独立65周年記念式典」の招待状が届き、今年1月9日東京のホテル・ニューオータニでの独立記念式典に招待された。式典には麻生副総裁・勝俣経団連日本緬国経済委員長・各国大使・内外行政／経済界関係者と制服の各国駐在武官（含自衛隊）など約400名が招待された。席上私から大使に「今年5月頃当団体から緬国に消防車4台を無償供与したい」旨を申上げると大使は笑顔で「貴団体から我国への絶え間ない支援に国民を代表して感謝します」との温かいお言葉をいただいた。

2004年～2013年迄、当団体から緬国に無償供与した緊急車両は、消防車13台・救急車4台と検診車2台（胸部X線装置付と胃部超音波装置付）の合計19台となる。

今後も技術協力・無償資金協力・有償資金協力などは国策としてJICA等を通じて実施されると思う。しかし、緬国国民の日常生活向上などの細部については、引続きNPOが開発途上国の発展に寄与できる事も多いと信じ、日本と緬国との架橋になるNPOの一員として、今後共活動していきたいと願っている。

●会員趣味のコーナー●

「陶芸」 葩島宏海



20年ほど前に陶芸倶楽部を立ち上げ会員と共に陶器づくりを楽しんでいます。窯は電気とガス、絵画や彫刻と違って仕上げは窯任せなので、思いがけなく良い作品になる事もあります。写真は染めた粘土で紋様をつくる練込技法のものです。

木崎窯陶芸倶楽部

さいたま市浦和区木崎 1-2-4 Tel 048-886-6208

●会報「国際青年」に

原稿・写真の提供のお願い

会報「国際青年」を毎年5月および11月に発行しており、原稿を募集しています。

- ・派遣される方については、派遣先での活動の様子を原稿と写真でお寄せください。「現地レポート」として、掲載させていただきます。

原稿の字数は、タイトルを含め最大で800～400字、写真は2枚程度でお願いいたします。

なお、一言コメントでも結構です。

- ・留守家族の方も、家族の思いなどをメールやFAXで寄せください。
- ・会員のみなさんも、「読者の声」や近況そしてご意見をメールやFAXでお寄せ下さい。
- ・会報は、海外の派遣先でも読んでいただけるようホームページにのせさせていただきます。

■新会員のご紹介 (35号発行以降入会の方)

殿 岡 紀 (さいたま市)
本 田 展 治 (さいたま市)
近 藤 清 次 (さいたま市)
小松原 豊 (さいたま市)
齋 藤 勉 (八潮市)
川 上 律 子 (行田市)
小 沼 博 (さいたま市)
端 野 喜 光 (さいたま市)
小 野 美恵子 (蓮田市)

《お知らせ》

1 帰国隊員の特例採用 (35号以降)

埼玉県職員4人、埼玉県教員2人(小学1、
中学1)、さいたま市教員1人(中学1)が合格
しました。

2 ホームページの再構築について

ホームページを再構築させていただきました。
新年度から下記アドレスとなります。
<http://www.sodaterukai-saitama-jica.com>
親しみやすい内容を目指し、少しずつ充実させ
たいと思いますのでご覧ください。

3 事務局の移転

当会の事務局は、事務局長宅に置いていま
すが、5月25日の総会後に移転します。

〒330-0063

さいたま市浦和区高砂4-11-17 井上 泰一
TEL 048-862-1234 FAX 048-862-1235
メール inotai0430+skssk@gmail.com

4 JICA ボランティア帰国報告会

今年度2回目の報告会(1回目は5月25日
の総会終了後)が、11月23日(土)の午後、
埼玉会館で開催されることが決まりました。詳
細は後日皆様にお知らせします。

5 JICA 地球ひろばの一部移転

昨年9月に市ヶ谷へ移転した「地球ひろば」
の内、壮行会や家族連絡会に係る業務が、4月
1日から青年海外協力隊事務局のある、千代田
区二番町に移転しました。

新住所：〒102-8012 千代田区二番町5-25
二番町センタービル
参加促進・進路支援課
TEL 03-5226-9804

国際青年

■「国際青年」の文字は、発足当初から会報のロ
ゴマークとして親しまれていますが、元当会理事
の筆によるものです。

中国後漢(西暦25～220年 日本は弥生時代)
時代の隷書体とのことです。当時中国は都を長安
とし、西ではローマ帝国が栄え、シルクロードを
通して東西の人々の交流が全盛をきわめた時代で
した。このロゴマークは「埼玉国際青年を育てる
会」にふさわしいものですので、今後とも大切に
利用させていただきたいものです。(高野直明)

入会のご案内

当会では、随時会員を募集しております。
ぜひお友達を紹介してください。申込書な
どは事務局までお気軽にお問合せください

【年会費】

- ①個人会員：一口 3,000円
- ②団体会員：一口 10,000円
- ③法人会員：一口 30,000円
- ④ご 寄 付：大歓迎

■編集後記

4月に入り、寒さも和らぎながらも、炬燵のな
かで原稿を整理しながら、「多くの方々がこの会
報のために原稿を送ってくださった気持ちを、ど
のようにしたら正確に伝えられるか」を、自問し
ています。そして、読者が簡便に読み易く、読ん
でみたいと思うには、多くのみなさんの声に耳を
傾けていかなければならないと思います。今号は
現地レポートをたくさんお送りいただき、任地の
事情が理解でき、隊員の頑張っている姿が目につ
かびます。隊員にエールを送るつもりで「読者の
声」として投稿いただければ隊員のはげみになるで
しょう。

(高野直明)

- ・発 行：埼玉国際青年を育てる会
- ・編 集：広報委員会
- ・事務局：さいたま市浦和区高砂4-11-17
(井上事務局長宅)
TEL 048-862-1234 FAX 048-862-1235
E-mail: inotai0430+skssk@gmail.com
・<http://www.sodaterukai-saitama-jica.com>